

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 16 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370877

研究課題名(和文) 中世フランス都市家屋に関する地域的類型の研究

研究課題名(英文) Regional typology of town houses of Medieval France

研究代表者

堀越 宏一 (Horikoshi, Koichi)

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究者番号：20255194

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：ゴシック式アーチの開口部をもつ「クリュニー型」石造町家と水平梁の開口部のハーフティンバー式木造町家という中世町家の二類型の地理的分布を調査し、前者が、フランス中南部のサンチャゴ巡礼路沿いの中世都市に普及した特殊な建築類型だったのに対して、後者がより普遍的な建築様式である、という仮説は、おおむね実証された。

ただし、現地調査では少なからぬ反例も発見した。トゥールーズ地方では、サンチャゴ巡礼路都市でも、石造町家の残存例がない都市が存在する一方、ブルゴーニュ地方では、サンチャゴ巡礼路に関係のない都市や村にも「クリュニー型」町家が存在している。このような原則と例外の間の説明が今後の課題である。

研究成果の概要(英文)：We investigated the geographical distribution of two types of medieval townhouses, "Cluny style" stone townhouse with openings of Gothic style arch and half-timbered wooden townhouse having the opening with horizontal beam. The hypothesis that the former is a special type of architecture popularized in medieval cities along the route of Santiago de Compostela in south central France, whereas the latter is a more universal architectural style, was generally proved.

However, we found some counterexamples in field survey. In the Toulouse region, even in the Santiago pilgrim's way city, there are cities where there are no remaining stone townhouses, while in the Burgundy region we found that there remains "Cluny style" townhouses in cities and villages unrelated to the Santiago pilgrim's way. Explanations between these principles and exceptions are future tasks.

研究分野：中近世ヨーロッパ史

キーワード：中世ヨーロッパ 都市 町家 サンチャゴ巡礼

## 1. 研究開始当初の背景

ヨーロッパの中世建築については、教会や修道院などの教会建築と城や都市囲壁などの軍事建築と比べると、一般家屋に関する関心は、歴史学や考古学のみならず建築史の分野においてすら低調である。したがって、フランスにおいても、こうした中世町家に関する研究史も、さほど古くに遡るものではない。1970年代以降、カーン大学のミシェル・ド・ブアール Michel de Bouard を中心として、学術的な中世考古学が次第に形成されていくなかで、まず、ジャン＝マリ・プゼ Jean-Marie Pesez (社会科学高等研究院) やガブリエル・デミアン・ダルシャンボ Gabrielle Démians-d'Archimbaut (エクス・アン・プロヴァンス大学) のような先駆的研究者が中世農村の発掘により中世農家建築研究の分野で大きな成果を挙げる。さらにその後、特にジャン＝マリ・プゼは、イヴ・エスキュー Yves Esquieu (エクス・アン・プロヴァンス大学) らとともに、中世都市家屋にも関心を寄せるようになっていった。両者の共同作業は、Éd. Yves Esquieu et Jean-Marie Pesez, *Cent maisons médiévales en France (du XII<sup>e</sup> au milieu du XVI<sup>e</sup> siècle)*, Paris, 1998 という、農村と都市双方の代表的な中世家屋を網羅した総合的著作に結実している。

フランスの中世都市家屋に関しては、その研究対象として最も重要な都市は、11世紀末から14世紀にかけての町家が124軒も残存する中部フランスの修道院門前町クリュニー Cluny である。特に、ここには、ヴェネツィアとともに、ヨーロッパでもっとも多く、ロマネスク様式(11～12世紀)の住宅が残されていると言われている。クリュニーの町家に関しては、ピエール・ギャリグー・グランシャン Pierre Garrigou Grandchamp とジャン＝ドニ・サルヴェク Jean-Denis Salvègue を中心とする地元の建築史研究グループ(クリュニー建築研究センター Centre d'Etudes Clunisiennes)が、1980年代初め以来、長年にわたり建築考古学的研究を積み重ねてきている。それによって、クリュニーの中世町家については、その都市内における配置と分布の状況、正面壁面と内部構造に関する建築的諸要素、そして各種装飾や室内設備などにいたる諸問題が多角的に解明されつつある。

こうした研究が積み重ねられていった結果、フランス各地に現存する中世都市家屋について、建築的構造に関する情報が収集・分析され、都市民の住居であると同時に、商店や手工業者の工房でもあった町家の多機能的構造に光が当てられるようになった。さらに、都市内の街区における町家の配置の検討を通じて、教会・城・市庁舎・市場広場などとともに、都市景観の構成要素としての町家の役割も重要視されるようになった。こうし

て、これまでは、教会建築と公共的建築物に関してのみ論じられてきた中世フランス都市の建物群の具体像が、より詳細かつ多角的に明らかになりつつあり、その結果、現在、中世フランス都市に対する理解は格段に立体的奥行きを備えたものになっている。

翻って、日本では、中世町家に関する研究はごく限定的なものに留まっている。そのなかで、大橋竜太『イングランド住居史』(中央公論美術出版、2005年)と後藤久『西洋住居史』(彰国社、2005年)は、共に中世の町家を含むヨーロッパ住宅史の貴重な概説であり、特に後者は、古代ローマの都市住宅と中近世ヨーロッパの町家の建築様式上の連続性に触れている点で有益である。

しかし、後藤久の著作は、近世パリにおける住宅の形状について根本的な無理解を含んでいるという点で、大きな欠陥があると考えられる。すなわち、後藤は、16世紀以降のパリの都市景観図から、そこに古代ローマの集合住宅建物 insula に見られる、L字をひっくり返したような形の鉤型1階開口部と同様の形状を見出し、それが古代から中世への町家の連続性を示していると主張する。けれども、建物全体が石造だった古代ローマの町家とは異なり、16世紀以降のパリの町家の大半は、1階のみ石造で、2階より上の上部階は木造のハーフティンバー様式だったと推定される。確かに、その1階開口部の形状は、古代ローマ町家のそれと類似した鉤型であるのだが、古代ローマ町家ではそのすべてが石造りであるのに対して、中世町家では木製の水平梁が開口部の上辺を支える構造になっているので、両者の間には、後藤が主張するような対応関係は存在しないように思われる。この問題は、後述する2011～2013年度の科研費基盤研究(C)を行うなかで気が付き、本研究に取り組むなかでも、明確になった成果の一つでもある。

私自身がこれまで行ってきた中世フランス町家研究については、2005～2007年度に、科研費基盤研究(C)「中世フランスの住空間の構造と機能に関する歴史考古学的研究」を許されて、城と農村家屋とともに、中世都市家屋に関する概観的分析を行った。その成果を発展させた形で発表した「中世クリュニーの町家の装飾窓(claire-voie)」(『東洋大学文学部紀要・史学科篇』2010年)では、クリュニーに残されている町家の2階部分の窓の形が、ロマネスク式や初期ゴシック式教会建築における高窓や教会西正面上部の連続アーチ列に由来するものであることを推論した。

さらに、2011～2013年度の科研費基盤研究(C)「中世フランスの都市家屋の構造・建築様式・分布に関する歴史考古学的研究」では、フランス中南部のミディ・ピレネー地方とラングドック地方において、クリュニー修道院がその運営に深く関与したサンチャ

ゴ・デ・コンポステーラ巡礼の巡礼路沿いの諸都市に、クリュニーに現存する中世町家と類似したアーチ型の1階開口部と連続アーチ列からなる2階窓を備えた「クリュニー型中世町家」が数多く分布していることを明らかにした。本研究では、これらの先行研究の内容をさらに推し進め、次のステージに発展させることを目指した。

## 2. 研究の目的

これまで申請者が実施してきた調査の結果、フランス中南部のサンチャゴ巡礼路沿いないしその近隣の諸都市（Périgueux, Cahors, Saint-Antonin-Noble-Val, Figeac, Caylus, Cordes-sur-Ciel etc.）において、アーチ型開口部と窓をもつ「クリュニー型中世町家」が数多く分布することが明らかになる一方で、それ以外の北部フランス諸都市（Rouen, Dijon, Paris etc.）では、水平の木製の梁を備え、四角い鉤型の開口部を持つ町家が一般的だったらしいという対照的な事実を予想するに至った。

このため、本研究は、実施当初には、次のような研究目的を掲げていた。

調査範囲を中南部以外のフランスの主要地域に拡大し、これら対照的な形状を持つ二種の中世町家の分布状況を、より広範に調査し、確定する。

そのような作業を通じて、クリュニーを起源とすると考えられる「クリュニー型中世町家」が、フランス中南部全体のサンチャゴ巡礼路沿いの諸都市にのみ普及した特殊な石造建築類型だったのに対して、北部フランスなどのそれ以外の地域の一般的な町家は、1階の壁面と柱が石造りで、水平の梁は木製であるような鉤型開口部をもち、2階以上は木造のハーフティンバー式であり、それが、技術的には、ロマネスク式ないしゴシック式のアーチ型開口部よりも単純な構造をもつ、より普遍的な建築様式だった、という仮説の実証を目指す。

同時に、住居であると同時に、商業店舗や手工業者の工房でもあった中世都市独特の多機能的家屋の構造と機能を、「クリュニー型中世町家」である場合とそうでない場合それぞれの類型に応じて、個別具体的に検証し、その歴史考古学的特徴と時代的な変遷を明らかにする。

## 3. 研究の方法

方法論としては、2011～2013年度の科研費基盤研究(C)「中世フランスの都市家屋の構造・建築様式・分布に関する歴史考古学的研究」と同様である。

まず、研究対象地域における現存ないし発掘された中世都市建物に関する建築考古学的な先行研究を分析することにより、現在の問題関心のありかを探ると同時に、残存す

る具体的な中世町家の情報収集を行う。さらに、調査対象となる可能性のある中世町家の現状については、フランス文化省の歴史的建造物関連のデータ・ベース（「メリメ Mériemée」）を代表として、幾つかのデータ・ベースが公表されている。そこでは、中世に遡るフランス全域の歴史的建造物の情報が、図像を含めて網羅的に収集、公開され、自由に閲覧できるようになっている。）を利用して、その個別情報を網羅的に調査する。

それらの準備を経たうえで、現地調査を行う。現存ないしこれまでに発掘対象となった中世町家とその関連施設を現地で実際に調査するほか、博物館などに保管されている考古学資料も調査する。

研究対象となる都市と町家について、当該地域の公文書館や図書館に所蔵されている古文書、図版、地籍図を調査して、図像史料も含めた中世町家に関する一次史料の収集に努める。

これら3つの方向から、フランス南部のサンチャゴ巡礼路沿いの諸都市に残されているアーチ型開口部と窓を備えた「クリュニー型中世町家」と、北部を中心とした、それ以外のフランス諸地方に残存する水平の木製の梁を備えた中世町家という、対照的な形状を持った二種類の中世町家の地理的分布と歴史的背景、それら双方の内部空間の構造と機能を解明することを目指した。

具体的な調査地域としては、これまで現地調査を実施していなかったトゥールーズ以南のミディ・ピレネー地方、ブルゴーニュ地方、オーベルニュ地方を想定した。

また、フランスにおける最新の研究状況の把握と人的コネクションの確保のために、フランスの研究者との連絡の確保に努めた。これまでも常時連絡を取り合ってきたナンシー大学中世考古学研究センターの研究者（ナンシー大学名誉教授であり、中世考古学研究センターの創設者である M・ビュール Michel Bur 氏、ナンシー大学中世考古学研究センター主任研究員であり、中世建築物の考古学研究に関する第一人者である C・クレメル Charles Kraemer 氏など）のほか、ディジョン大学文学部の中世考古学担当准教授であるエルベ・ムイユブーシュ Hervé Mouillebouche 氏、パリの国立高等学術研究院の中世図像史料の専門家であるペリーヌ・マヌ Perrine Mane 氏らと、フランスの中世考古学研究の状況について意見交換・討議を行うことによって、中世都市家屋の現状とその研究状況に関して、できる限り最新の情報と研究成果を収集した。

## 4. 研究成果

先行研究に基づく調査対象の確定、歴史的建造物のデータ・ベースであるメリメを利用した中世家屋の残存状況の確認を行った後、

研究第 1 年目（2014 年度）には、フランス南西部のミディ・ピレネー地方南部とラングドック地方において、中世都市家屋の残存状況の調査を行った。

訪問地の中では、今回初めて調査したミディ・ピレネー地方南部において、中世にまでさかのぼる石造民家が驚くほど少ないことを確認したことは、逆説的ながら一つの収穫だった。一般に、中世の石造家屋については、修道院や教会の影響下に建設されたことが推定されるが、司教座都市であると同時にサンチャゴ巡礼路も通っていた Saint-Bertrand-de-Comminges では中世石造町家の残存例がほとんどない一方、同様の背景を持つ Saint-Lizier では、古いアーケードとともに、わずかながら石造町家を確認することができた。同地方のこの他のサンチャゴ巡礼路沿いの都市でも、16 世紀以降に建てられたアーチをもつ建物が多く、中世のゴシック式の店舗開口部やアーケードを持つ事例はほとんど確認されなかった。これを、中世都市家屋が多く残されているトゥールーズ以北の諸都市の状況と比較することは、中世町家残存の歴史的条件を考察する手がかりとなると思われた。

他方、Mirepoix では、中世に遡ると思われるハーフティンバー様式の多数の町家とアーケードが残されていた。これは、一般に石造建築が主体の南フランスの都市としては例外的な事例であり、その特殊歴史的な背景を追究することが重要である。また、北フランスに残るハーフティンバー様式の建物と比較する必要性もあるように思われた。

また、Fourcès では、シルキュラード<circulade>と呼ばれる南仏特有の環状集落を見学した。加えて、Larressingle 等では、囲壁に囲まれた教会起源の小型集落を見た。これに Auwillar 等のバスティードを加えると、フランス南部に多い防備集落の多様な形態を網羅的に調査することができた。

研究第 2 年目（2015 年度）には、前年同様の準備作業を経たのち、これまで未調査だったフランシュ・コンテ地方とブルゴーニュ地方において現地調査を実施した。

そこでは、多くの中世町家が残されている都市として、改めて Cluny を再訪したほか、ルネサンス期の町屋が多く残る Pérouges、16～17 世紀の町家群が観察できる Villefranche-sur-Saône などを訪れた。そのなかで特に参考になったのは、フランシュ・コンテ地方の Château-Chalon、Sougey (Montrevel)、ブルゴーニュ地方中部の Charlieu、Marcigny、Saint-Gengoux-le-National、Chalon-sur-Saône、Couches、北部の Châteauneuf、Saint-Thiébauld、Vitteaux、Flavigny-sur-Onzerain、Noyers、Montréal などの小都市に残る中世町家である。そこでは、Saint-Thiébauld でゴシック式 1 階開口部をもつ 12 世紀の石造町家 1 軒を発見でき

たほか、各地で石造町家と木造町家が混在して残存することを確認できた。

Noyers に多く残存していたハーフティンバー様式の木造町家については、15 世紀頃のハーフティンバー様式の町家では、同時期の石造窓に見られる窓枠上辺の宝珠のような曲線装飾が模倣されていることに気づいた。一般に、14 世紀以前にさかのぼる木造家屋の現存例はほとんどないと考えられているので、この「宝珠状曲線装飾」を手掛かりにして、現存する最古の木造町家であると思われる 15 世紀のハーフティンバー様式の町家群の所在を把握することが出来ると予想される。

研究第 3 年目（2016 年度）にも、前年同様の準備作業を経たのち、これまで未調査だったフランス中部のリヨンとオーベルニュ地方において、中世都市家屋の残存状況の調査を行った。

リヨンでは、旧市街のサン・ジャン通りを中心とした地区において、ルネサンス期の町家を数多く観察するものの、中世町家は残存していないことを確認した。リヨンは、中世以上に、15 世紀以降のルネサンス期に発展した都市なので、中世の町家その後建て替えられていったであろうことは、ある程度予想していた結果だったが、町家の建設と残存の状況に、都市そのものの歴史が深く関与していることを改めて実感した。

オーベルニュ地方では、Thiers、Clermont-Ferrand、Besse-et-Saint-Anastaise、Saint-Fleur、Le Puy-en-Velay、La Garde-Guérin において、15 世紀の町家を発見できたが、逆に 14 世紀以前にさかのぼるものはほとんど存在しないことを確認した。ミディ・ピレネー地方と並んで、中世の史跡や歴史的建造物が数多く残されていることで知られるオーベルニュ地方で、Le Puy-en-Velay を例外として、ゴシック式の店舗開口部やアーケードを持つ中世町家が予想外に少ないことは、Le Puy-en-Velay を除くと、有力なサンチャゴ巡礼路都市が存在しないことと相関関係にあることが予想される。また、ハーフティンバー様式の木造建物がごく少数にとどまっていたことは、石材の豊富なオーベルニュ地方の地域的特性に因るものと考えられる。

他方、Moudeyres、Bigorre、Les Maziaux などの小集落には、数多くの藁葺き農家（1 階部分は石造で、しばしば家畜飼育スペースを持つ）が残されていた。そのいくつかの内部を見学することが出来、農家建築の構造と使用方法を具体的に詳しく知ることが出来た。これは現在のフランスにおいて稀な事例である。また、複数の村落（Léotoing、Saint-Julien-Chapteuil）で、バナリテの公共パン焼きかまどを発見したが、これもまたオーベルニュ地方の特色である。

町家ではないが、中世農村集落の考古学遺跡が調査できたことも、本年度の大きな収穫

だった。Essertines, Montchauvet, Rochecolombe の3ヶ所において、中世廃村遺跡を見たが、いずれも斜面に位置していて、中世農村の地理的分布と同時に、その後放棄された理由という点で共通性があると考えられる。

3年間の調査と研究の結果を総括すると以下ようになる。

ゴシック式アーチの開口部をもつ「クリュニー型」石造町家と木製水平梁の開口部のハーフティンバー式木造町家という中世町家の二種類の地理的分布を調査し、前者が、フランス中南部のサンチャゴ巡礼路沿いの中世都市に普及した特殊な建築類型だったのに対して、それ以外の地域では、後者がより普遍的な建築様式である、という仮説は、おおむね実証されたと考えられる。

ただし、3年間にわたる現地調査では、少なからぬ反例も発見することが出来た。トゥールーズ以南のミディ・ピレネー地方では、サンチャゴ巡礼路都市でも、石造町家の残存しない都市が大部分である一方、ブルゴーニュ地方では、サンチャゴ巡礼路に関係のない都市や村落にも「クリュニー型」中世石造町家が存在している事例が観察された。「クリュニー型」町家が集中して残されているミディ・ピレネー地方北部とリムーザン地方について、なぜこれらの地域において、この興味深い石造町家が中世に建てられ、そして集中的に残されているのかという問題に対する、より明快な説明を見出すことが今後の課題である。

その一方で、2種類の町家の違いを、建物全体の構造から説明する可能性もありそうに思われる。

すなわち、町家の建物全体が石造か、木造＝ハーフティンバー式か、ということによって、1階開口部の形状が、石造アーチである場合と、地上階における石造ないし木造の柱に木製梁を架ける場合という対応の違いが出てくる可能性が大きいと考えられるのである。

2階以上が石造である場合、その総重量を支えるためには、原則として、1階開口部は石造アーチでしっかりと支える必要があるのに対して、木造のハーフティンバー式の建物では、費用の掛かる石造アーチを用いなくとも太い木製の梁用いることによって2階以上の上部階の重量を支えることが可能だったと考えられる。このような建築技術上の理由から、ゴシック式アーチの開口部をもつ石造の「クリュニー型中世町家」と木製水平梁の開口部のハーフティンバー式木造町家という中世町家の二類型が生みだされたのではないだろうか。

このような一般的説明と現在のサンチャゴ巡礼路都市に石造の「クリュニー型中世町家」が比較的多く残されているという観察結果を重ね合わせて、両者の内容と歴史的形成

過程を整合的かつ合理的に説明できるような答えを見出す必要があるように思われる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

HORIKOSHI, Koichi, Les légumes dans les cuisines française et méditerranéenne au Moyen Age et à la Renaissance, in *Archives and Records of the Medieval Europe, The 9th Korean-Japanese Symposium on Medieval History of Europe, 2 May-3 May 2016, Seoul, Korea, 2016*, pp.191-203. (査読無)

HORIKOSHI, Koichi, Les archives de la famille du Febvre de Laubrière à la bibliothèque de l'Université de Hitotsubashi, 2015年4月、一橋大学図書館ホームページにおいて公開。(査読無)

(書評・堀越 宏一)『マルク・ボネ』中世末期ネーデルラントの都市社会 近代市民性の史的探求』ブルゴーニュ公国史研究会訳、八朔社、2013年、『社会経済史学』第81巻第4号、2016年2月、139-141頁。(査読有)

(書評・堀越 宏一)『コレット・ボヌ著』幻想のジャンヌ・ダルク 中世の想像力と社会』阿河雄二郎・北原ルミ・嶋中博章・滝澤聡子・頼順子訳、昭和堂、2014年、『西洋史学』255号、2014年12月、57-59頁。(査読有)

翻訳「Hervé Mouillebouche, *Palais ducal de Dijon. Le logis de Philippe le Bon*, Dijon, Centre de castellologie de Bourgogne, 2014」の日本語要旨。(査読無)

[学会発表](計4件)

堀越 宏一「中世フランスにおける石造と木造の町家 1階開口部による類型論の試み」REN研究会、青山学院大学渋谷キャンパス、2016年5月28日。

HORIKOSHI, Koichi, “ Les légumes dans les cuisines française et méditerranéenne au Moyen Age et à la Renaissance ” The 9th Korean-Japanese Symposium on Medieval History of Europe, National University of Seoul, 2 May-3 May 2016.

堀越 宏一「中世フランスの都市家屋」第7回合同沼地研究会、東京大学工学部、2015年5月30日。

堀越 宏一「中世フランスの都市家屋」西欧中世史研究会春季研究会、富山大学五福キャンパス、2015年5月15日。

[図書](計1件)

堀越 宏一(河原温との共著)『図説・中世ヨーロッパ庶民の暮らし』河出書房新社、

2015年2月。

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

堀越 宏一 (HORIKOSHI, Koichi)  
早稲田大学教育・総合科学学術院・教授  
研究者番号：20255194

### (2)研究分担者

なし ( )

研究者番号：

### (3)連携研究者

なし ( )

研究者番号：

### (4)研究協力者

なし ( )